

『大学改革 秩序の崩壊と再編』（天野郁夫著）ほか

杉 本 和 弘

04 年秋、広く大学教育に関心のある一般読者を対象にしたと思われる書籍が立て続けに出版された。管見に入ったものを刊行順に列記すると、中井浩一著『徹底検証 大学法人化』（中公新書ラクレ 840 円＋税）、天野郁夫著『大学改革 秩序の崩壊と再編』（東京大学出版会 2000 円＋税）、潮木守一著『世界の大学危機 新しい大学像を求めて』（中公新書 780 円＋税）、杉山幸丸著『崖っぷち弱小大学物語』（中公新書ラクレ 720 円＋税）の 4 書である。ほぼ同時期に、一般向けに、大学教育関係の本がこれほど多く刊行されたことに驚きを禁じえないが、その背景には、大学教育の問題が社会的に大きな関心事になっていることや、国立大学法人が現実動き出し、さらなる大学改革の気運が起こっていることもあるかもしれない。

ここでは、上記の 4 書のうち、マクロ的な視点から今後の大学のあり方を示唆しようとしている潮木本と、それとは対照的に、新設私大の現場から見た大学教育論である杉山本、そして、日本の大学改革の問題点をバランスよくまとめた天野本を紹介したい。

『世界の大学危機』は、イギリス、ドイツ、フランス、アメリカの大学事情を、歴史をさかのぼって概観しながら、それぞれの国の大学や高等教育機関が抱える問題について論じ、最終章で現代日本の大学の問題に言及している。この本は、桜美林大学大学院の大学アドミニスト

レーション課程のテキストを元にしたということであるが、一般教員の立場から読んでも興味深い内容が多い。特に、各国の現在の問題として挙げられている事柄——ドイツであれば、卓越性の追求と大学教育の普及という対立的な要件をいかに調整していくかという問題、フランスでは、エリート養成校であるグランゼコールと一般の大学という二つの制度が並立していることで生じる問題、アメリカでは、大学院教育のあり方の問題——は、大なり小なり現代日本の高等教育制度が抱える問題にも通じるものがあるだろう。

本書では、総じて、ユニヴァーサル化した大学（高等教育）の今後のあり方を話題にしているのだが、現代の多様化した学生に対応するべく、著者が提言していることのの一つが、大学は、「知識・技能のディズニーランド」となり、「成人のための学習センター」になるべきであるということである。

対するに、『崖っぷち弱小大学物語』は、教育現場の卑近で具体的な話題が多い。著者は、京都大学霊長類研究所長を経て、2000 年から東海学園大学人文学部教授となり、学部長も務めた人である。本書において著者は、「日本をこれから動かしていくのは A ランクや B ランクの大学を出たリーダーだけではない。『その他大勢』こそ社会を構成するマジョリティそのものであり、好むと好まざるとにかかわらず、無意識のうちにも社会の流れ、

すなわち良くも悪くも新しい文化を作る最前線部隊とその予備軍なのである」という認識のもとに、「全体の三分の二以上を占める崖っぷちに立たされた弱小大学でいま何が起きているか、そして、そこでどのような闘いが営まれているか」を提示しようとした、と述べているが、ここに述べられていることは「弱小大学」に限らず、国公立の大半の大学に当てはまるものと考えられる。

例えば、学生たちは何を期待して大学に入學してくるかという問題。著者のゼミ学生が行ったアンケート調査によれば、300人余の学生のうち、教養や専門知識を身につけたいといった「将来目標型」、資格取得や技術の習得、就職のためといった「近未来目標型」、やりたいことを見つけるためという「目標探索型」、学生生活を楽しむため、大学くらいは出ておこうという「楽しみ、無目的型」がほぼ4分の1ずつであったという。著者が憂慮するのは、「近未来目標型」と「無目的型」である。「無目的型」学生の増加が教育現場にとって厄介であることは容易に想像できるが、資格志向の学生の増加やそれに迎合する大学のあり方への批判的な視線は本書の眼目のひとつである。著者は、資格や免許志向を、インスタント教育を求める安易な態度とし、したがって、大学もそれに迎合するのではなく、本来の教育目的を再確認すべきであるという。そこで著者が強調するのが教養教育である。それはまさに人文系学部の重要な教育目的の一つであるのだが、人文系に限らず理工系でも、就職に直接役立つ技術や知識の教育とは別に必要であるとするのである。「さまざまな考え方の存在を知り、自分の考えを作り、必要に応じてそれを行動に移させる、その基盤づくり」、即ち「人間づくり」が「大学教育の

本命」だというのが著者の意見である。

本書には、携帯電話や飲食物、化粧等の注意をしなければ成り立たない授業風景など、さもありなんと苦笑と共感を禁じえない箇所も多い。ただ一つ望むとすれば、著者の言う教養教育の具体的な中身を明らかにしてほしいかということであろうか。ともあれ、日日の教育活動に忙殺されている現場の教員にとって、ささやかな〈癒し〉と〈元気〉を与えてくれる一面もある本である。

上記の二書は、巨視的と微視的、あるいは、片や「知識のディズニーランド」を目指せといい、片や教養教育を重視せよというように、対照的な面が目につきやすいかもしれないが、ここに、天野氏の『大学改革』を置くと、前二書を結ぶ重要な事柄が見えてくるように思う。

『大学改革』は、著者が各所で行った講演の記録を整理、加筆したものである。それゆえ、著者も「はじめに」で記しているように、内容の重複が多少あるものの、「具体的で読みやすい内容」になっている。

1章では、大学改革の流れを文部科学省の政策を中心に跡づけ、現在どのようなグランドデザインが求められているかについて述べ、2章からは、各論として、まず、様々なデータをもとに高等教育の変化を捉え、今後の変革の方向性を探り、3章では、国立大学の法人化と「遠山プラン」の問題を扱い、4章では、評価システムの構築の問題、5章では、専門職大学院の問題、6章では、大学における「教育」の改革の問題を論じている。そして、最後の7章で、改革の全体像を俯瞰しようとしている。全体に、国立大学中心に問題を論じているきらいはあるものの、現場での具体的な事例にも配慮しつつ、大局的見地か

ら問題を捉えようとしているように見受けられる。

評者が最も興味深く読んだのは、『『教育』改革のいま』と題された、第6章である。本書の中で、著者の危惧を伴った主張が最も強く表れているのもこの章であるように思う。ここで著者が問題にするのは、大学改革が近年の学生像の変質を捉えた上で進められているだろうかということである。まず、著者が指摘するのは、マーチン・トロウのいう「ユニヴァーサル化」とともに、社会的な状況変化によって、学生たちが、共に何かをするよりも、個で何かをするという傾向が強くなったこと。あるいは、子どもから大人へと成長する過程で、社会的に期待される発達課題が見えなくなってきたことである。

一方、それに応ずるような形で、91年に大学審の「大学教育の改善について」という答申が出されたが、それに基づく改革が、文部科学省主導、大学主導の改革であって、学生の側からの視点が欠けていると指摘する。即ち、特に国立大学でその傾向が強いのであるが、教養部や一般教育課程は解体したものの、専門教育の見直しがほとんどなされることなく、教員の方も、これまで以上に研究重視になって教育がおろそかになっているのではないかというのである。

では、学生の側からの視点とは何かというと、一つは、「大学というものを知的な挑戦の場として、再編成すること」、そして、そこで「訓練としてのディシプリン」の場を再創造し、学生たちに達成感を味わわせる仕組みを作り出すことだという。もう一つは、大学を人間形成空間の場として捉えなおすということ、即ち、クラブ、サークルやゼミ、研究室

といったこれまでの制度や仕組みをより積極的に活用することで、大学のコミュニティとしての機能を高めることだという。

ところが、文部科学省の大学政策が、「大学院重点化」、「専門職大学院」、「21世紀COE」と、研究重視、大学院重視の方向に動いていることもあって、改革は逆方向に進んでいると著者は見ている。しかも、そこでは学部段階での専門教育、専門職業教育とは何か、が十分問われていないというのである。ちなみに、著者は学部教育の目的を、「知識を通じて知恵を与える」ことだとし、その「知恵」の中身は、「4つのC」で表されるという。4つのCとは、communication, critical thinking, creativity, continuous learning であるが、こうした能力を与えるためにどのような教育をしたらよいか考えていくことが学部教育の重要な問題であるという。具体的な教育方法や内容は読者に預けられた形になっているものの、今後の大学教育のあり方を考える際の指針になると考えられる。

以上の拙い紹介によっても、天野氏の著書によって、前記の二書と、天野氏の著書とが結びつき、浮かび上がってくる問題が見えて来るのではないだろうか。それは、一言で言えば、学部教育の重要性の再確認であり、学部教育こそ再構築といっそうの充実が望まれているということである。当然といえばあまりに当然のことかもしれないが、大学改革といいながら、学部教育の重要さへの配慮が一つであるという現状認識があるゆえに、こうした本が相次いで刊行されたのだと理解したい。

（教授 人文学部 日本語日本文化学科）